

いつでも可能性を信じて

山口 恵 実

(平成20年度卒業)

私が南陽高校に入学した年から今年でちょうど十年になります。

私は現在、南陽市役所の総務課秘書係で働いています。

昨年、職場で、公益財団法人日本電信電話ユーザ協会主催の「電話応対コンクール」という大会に出場する機会をいただきました。私が業務の中で一番苦手だった電話応対。出場の話を受けたときは出ることが辛く感じられ、練習は何度もやめてしまいた

いと思いましたが、しかし、やるからには中途半端にしたくない、この機会に苦手な電話対応を克服できるかもしれない。そう思い、大会まで毎日欠かさず練習を重ねました。その結果、地区予選を突破、県大会で優勝し、全国大会に出場することができました。

この経験でふと高校時代を思い出しました。所属していた弓道部で思うように弓が引けなくなったとき、仲間同士で衝突したとき、大学進学のために何度も何度も書いた論文や繰り返した面接練習。もうやめてしまいたいと思った経験は数え切れない程ありました。しかし、そこからのあとひと踏ん張り。何かをやり遂げる上で大切な「諦めない」心は、南陽高校で学んだのだと改めて実感しました。南陽高校は私にとって、勉強にも部活にも全力で打ち込むことの

きる高校でした。

在学生の皆さんへ。多くのことに夢を見て、常に挑戦することを忘れないでください。失敗してもそこから多くを学んでください。一つでも気付きを得ることができれば、それは実りのある経験となり、皆さんが大きく成長できるチャンスです。皆さんの今後の活躍を楽しみにしつつ、私自身も新しいことに挑戦する気持ちを持ち続けたいと思います。



二十三年五月に開校した。地区の

小学校の一

部を間借り

しての開校

だったが、

勉学を志す

地区の青年

達が相集い、

一時は小滝

分室夜間部

を設置する



賑わいだった。

開校当初は農業科と家庭科、昭和三十八年からは商業科だけとなったが、閉校までの四十有余年の間に八百十八名の卒業生が巣立っている。旧校舎は昭和四十四年の地滑りで使用禁止となり、新築移転した新校舎も廃校によって姿を消したが、小春日和の中で「苦学群翔」の碑だけが往時の沸き立つエネルギーを今に伝えている。

空手道は、平成二十八年の八月二日にリオデジャネイロで開催された委員会で、二〇二〇年の東京オリンピックに正式種目として採用されました。私達にとっては、オリンピックという夢の舞台に立つという新たな目標ができ、一層頑張ることが出来ます。平成二十

在校生
部活動紹介

空手道部

現在空手道部は、二年生三名、一年生一名の四名で活動しています。野球やサッカーなどのメジャーなスポーツではなく、人数も少ない部ですが、朝・昼・放課後の練習に、一生懸命取り組んでいます。

八年度は、県高校総体や各種大会で優勝や入賞し、インターハイと国体に島貫業花（二年）が出場しました。また、平成二十九年度は、南東北インターハイが福島県猪苗代町で開催されます。私達も共催地の代表として出場し、全国で勝てる選手になるのが現在の一番の目標です。そのために一日一日の練習を大切に、内容の濃いものにしていきたいと思っています。

山形県内でインターハイや国体



などに出場してきた空手道部の伝統を引き継いで、今度は私達が、全国大会の先のオリンピック出場という目標を達成できるように精進していきたいと思います。

(主将 高瀬 優)

「苦学群翔」の碑
旧宮内高校吉野分校跡地

南陽高校正面門から県道山形南陽線に入り、北に十キロほど車で走ると、右手に小高い丘の上にある吉野公園が見えて来る。「吉野公園」の看板を目印に右折し、急峻で狭隘な坂を上ると、同公園に到着する。現在は地区民の憩い場となっているが、かつては吉野

中学校と宮内高等学校吉野分校があった地だ。

「苦学群翔」の碑は四阿の南側手前に据えられている。平成三年三月の開校を前に、同二年十月に閉校記念実行委員会が建立した碑で、碑文は卒業生の川照夫氏の創案による入選作だ。

吉野分校は、地区民の熱い要請を受け、当時の宮内高校に新設された定時制過程の一つとして昭和